

再生産理論における「表象」概念

—ブルデュー「ハビトゥス」概念を手がかりに—

秦野伸介（京都大学大学院）

0. はじめに

社会学において、主観主義対客観主義の対立、あるいは個人と社会の関係という問題は絶えず議論し続けられている。そしてこうした議論は、個人も社会も相互に相対的に自律したシステムであるという前提を共有しているので、解決されることもなく持続することになる。一方でこうした対立を乗り越えようとする議論もブルデュー、ギデンズなど数多い。本報告の目的は、その中でブルデューの議論を中心に上げ、再検討する中で、先の問題を巡る一般的な解決の方途を批判することである。まずはじめに、ブルデュー理論の鍵概念とされるハビトゥス概念を軸にした二項対立の乗り越えの試みを批判的に検討する。ハビトゥス概念の経験的研究に対する意義は留保するとし、果たしてこの概念が主客を統合する試みの中で有効たりうるか、という問いかけである。

本報告では、ブルデューの二項対立乗り越えの試みの中心にハビトゥス概念をおくことをやめ、それとは異なった枠組みをブルデューの理論から見だし、提示することを目指す。

1. 「表象」と「構造」の統合

ブルデューにとって二項対立の乗り越えは<客観化の客観化>というスローガンによって目論まれる。つまりブルデューは、出発点においては「客観主義」の立場に立ち、そこに主観—行為者の表象—を理論的に統合していくという方向性を目指しているようだ。

ブルデューは彼の（社会学の）対象たる「社会」を主観的意味と客観的構造の二重性を持ったものとして捉え、両者のいずれをも一方の意味に還元することなく説明しようと試みる。も

し、客観的構造の存在をはじめに宣言してしまうことができたなら、主観的意味は直ちに客観的關係を正統化するという「客観的」意味が付与されることになるだろう。ブルデューの<誤認—承認>という語り口からは、こうした「真の」客観的意味の存在とその隠蔽＝正統化作用としての主観的意味の立ち上がり、という説明で完結しているようにも見える。しかし、ブルデューはあくまでも客観的構造をアプリオリに指定する理論に対抗して理論構築を行っているのである。

ブルデューが目論んだプランは明快である。議論の帰着点を、主観・表象から切り離された客観的構造におかず、主観主義的な現実・表象を取り入れた新たな構造におこうとするのである。

この全体的な構造をブルデューは社会空間と呼ぶ。この社会空間における主観・表象と客観・構造との連関が課題として設定されることになるわけである。

2. 「構造」→「表象」？

ブルデューの社会空間の構造に関するもっとも一般的な理解は以下のモデルによってまとめられるであろう。

社会空間において、諸行為者の表象は、客観的構造によって構造化されたハビトゥスに従って産出される。そして逆に行為者の表象を生み出すことでハビトゥスは構造化する構造として客観的構造に作用していく。この場合、ブルデューの客観的構造とハビトゥスの関係における基本図式は以下のようなものとなる。

[図]

客観的構造→ハビトウス→行為者の表象

↑ _____ ↓

社会（客観的構造）と個人（ハビトウス）の二つのシステムの相互作用、こうした図式に基づく二元論の「乗り越え」の試み自体は何ら目新しい物ではない。もしこうした図式こそが重要なのであれば、ブルデュー・ギデンズを待たずともパーソンズさらにはウェーバーからでも同様の図式を抽出することは何ら困難なことではないのである。

ならばブルデューのハビトウス概念の意義はどこにあるのか。ハビトウス概念は一見、決定論的な客観主義理論に対する批判概念として、理論的に概念づけられているようにも見える。しかしブルデューはハビトウスがいかなる手順によって、いかなるものとして形成されるのか、そのメカニズムについて、必ずしも理論的に説明しているわけではないのである。

ブルデューはハビトウス概念をむしろ彼の経験的な研究から引き出している。職業や収入、学歴といった個人的な属性と、趣味、志向といった個人的な行動の対応が統計的、経験的レベルで「発見」されたとき、はじめてハビトウスという概念が措定されるのである。理論的に言えば、ハビトウスなる概念が構造の再生産を保証してくれるのではなく、逆に構造が経験的レベルで現に再生産されているという事態を「個人」の側で言い換えた概念がハビトウスなのである。

そうであるならば、「客観的構造がハビトウスを生み出した」という先の図式はいまだ理論的に何ら説明されたものではないことになる。これはブルデューの理論上の欠陥と言うべきであろうか。ハビトウスという概念によって社会空間内の循環を説明しようとする限り、そうだと言えるだろう。

しかしこのモデルは 1. で示した客観的構造を前提としておいてしまわないという課題をそ

もそも最初から裏切ってしまうことになる。だからブルデューが客観的構造からハビトウスを説明せずに、逆に個人のレベルの、経験的な観察結果から導き出したのは、彼の議論の流れにおいては全く自然なことなのである。するとブルデューの理論においてハビトウス概念の役割は先の図式とは異なったものとならざるを得ない。ハビトウス概念は、客観的構造と個人的主観・表象の連関の内部にあるのではなくて、客観的構造と個人的主観・表象を含み込んだ社会空間の存在を発見し、記述するインターフェイスとしての役割を果たすことになるのである。

3. 「表象」から構造へ

「表象 representation」という言葉のなかにはもともと背後の構造を想定し、その構造が認識可能な世界に再現前 representation されるという論理を含んでいる。しかしかかる論理は構造をはじめに、絶対的なものとして措定してしまうという理論的難点をもつことになる。ここにおいて表象概念の組み替えが要請されるのである。そしてこの試みはアルチュセールの「構造的因果論」のなかですでになされていた。

もしブルデューが[図]の論理の中でハビトウス概念を論じるのだとすれば、まさしくあの「表象＝再現前」の論理の中に入り込んでいくことになる。しかしブルデューが現実にハビトウス概念を記述した手続きはより慎重なものであった。そしてブルデューが実際にやって見せた手順は、アルチュセールの「構造的因果性」の論理を経験的な次元で応用したものだったのである。発表ではこの点に関して、より詳細に論じる。